まり居たりけるを見れば、○下略

〔運歩色葉集伊〕膝行（イサリ）

〔和字正濫抄二〕膝行　ゐざる　眞名未考、居ながら去なり、足のたゝぬかたはものを、ゐざりといふもこれなり、

〔倭訓栞前編四十三〕ゐざる　膝行をいふ、坐ながら行の義也、源氏にゐざり出など見えたり、拾遺集に、かたゐざりするみどり子ともよめり、

〔倭訓栞中編二十九〕ゐじる　居蹂躙の義なるべし、ゐじりよるなどいへり、

〔茶道早合點上〕茶室

潜口（くゞりぐち）　にじり上りともいふ、茶室へ入口なり、大サまどのごとし、

〔兼盛集〕戀

あふことのかたゐざりするみどり子のたゝん月にもあはじとやする

〔玉海〕文治二年二月廿八日丙子、此日除目初日也、○中略頭左中辨光長雖參入、依膝脛等灸治、不堪膝行、因之以兼親傳覽、

〔吾妻鏡十二〕建久三年七月廿五日丙申、幕下御束帶豫出御西廊、義澄捧持除書、膝行而進之、

〔新撰字鏡ク〕匍蒲胡反、平、匍匐也、波良波比由久、

〔類聚名義抄七〕匍蒲北反、匍匐、　匍匐ハラハフ、下音僕、伏也、

〔釋名三釋姿容〕匍匐小兒時也、匍猶捕也、藉索可執取之言也、匐伏也、伏地行也、人雖長大、及其求事盡力之勤、猶亦稱之、詩曰、凡民有喪、匍匐救之、是也、

〔書言字考節用集八言辭〕跂（クヽ）文選註、凡生類之行皆曰跂、　這人、草、

〔倭訓栞前編二十四波〕はふ　匍匐をいふ、虫には蚊行と見え、蝨には緣と見えたり、草木にいふは延

膝行

匍匐